

老協

M O N T H L Y

連載

現場から出た課題について解説
経営状況や資金調達の現状を
不安に思う職員が増加!?

現役介護士による
お仕事体験コミック
介護士は見た!

梅雨になるとイライラ…
そんな人にはどう対処する?
みんなの気持ち

野菜もたっぷり取れるピビンパ丼
介護食レシピ

緊急対談 第3弾

働きやすく、魅力ある
介護現場の構築を目指して

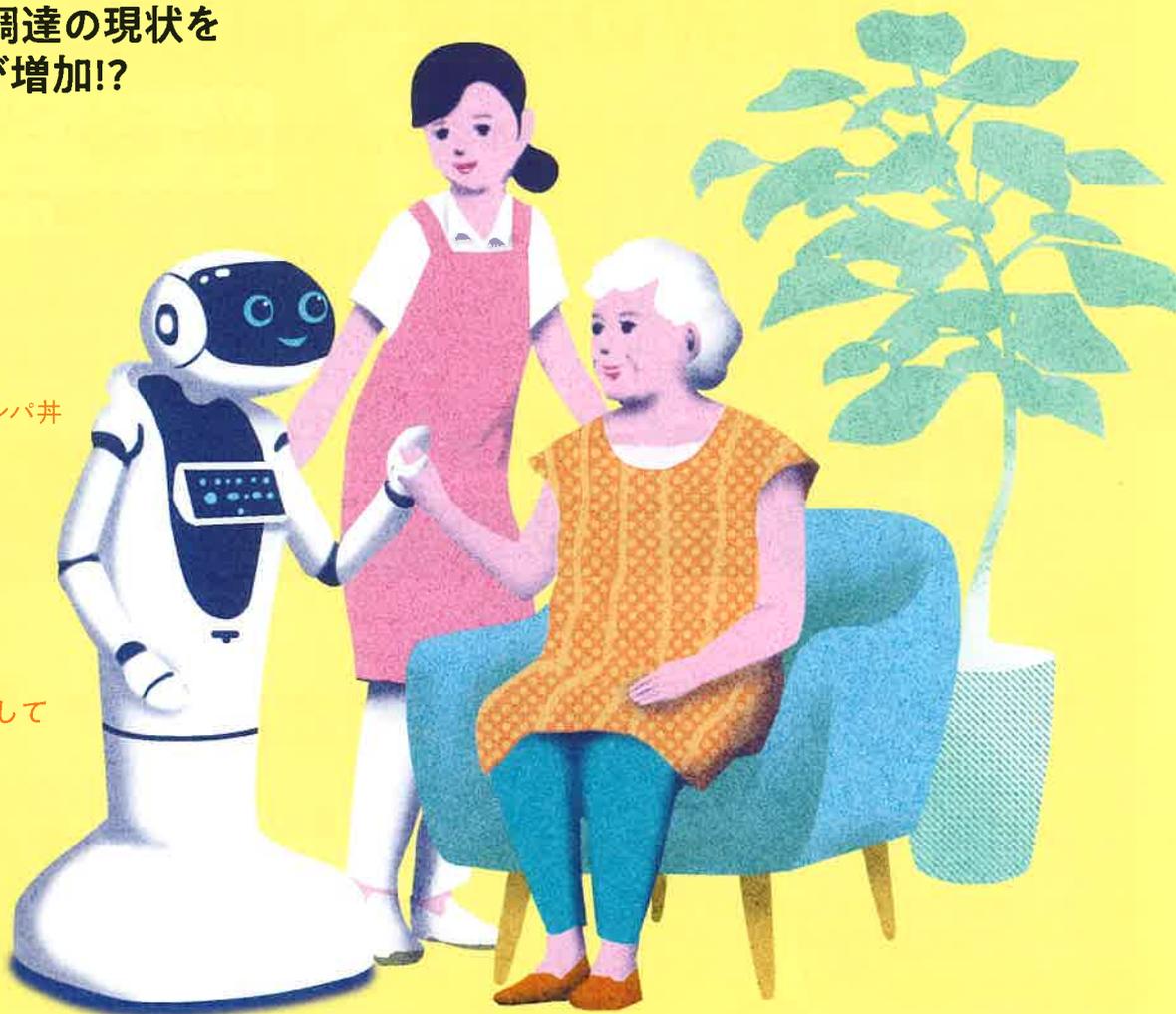
そのだ修光

(参議院議員)

×

平石 朗

(全国老人福祉施設協議会会長)



特集 いったいどうなる!?

介護イノベーション 最前線

人の人生に寄り添える喜びを若い人に伝えていきたい

平石「私は介護福祉士の専門学校も運営しているんですが、若い人はやっぱりICTやロボットへの理解が早いし使いこなすのも上手です。一方、介護は人を相手にする仕事ですから、利用者をよく知っているベテランの職員の活躍がどうしても注目されがちです。若い人を中心に、ICTを活用する場面を多く作って、ベテランと若手の活躍のバランスを取りながら、多面的に介護業務の魅力伝えていければと思うんです」

そのだ「最近では3世代同居、というのも少なくなってきたり、で、自身のおじいさん、おばあさんの臨終に立ち会う、ということもなかなかない中、若手の職員さんにとっては、利用者さんが自身のおじいさん、おばあさんであるような感覚で接しているのが見取れます。きっと彼らにとってはもう家族なんですね。何年も施設で一緒にいれば、その人の嫌な面も見ることがあるし、一緒に心が

から楽しめる瞬間もある。まさに家族そのものです。そして時にその人の人生の最後を作っていくことからもあるのが介護事業。涙を流しながら見送っていく職員さんたちの姿を見ると、この仕事を通じて人間的にも成長していることを頼もしく思いますし、そうした人たちに報いるためにも、まだまだやらなければいけないことはたくさんある、と感じています」

平石「われわれ老施設も引き続き国政の場でそのだ議員に発言し、活動していただきながら、魅力ある介護事業の完成に向けて努力していきたいと思っておりますので、これからもどうかよろしくお願いたします」

そのだ「ありがとうございます。こちらこそ、引き続きよろしくお願いたします」

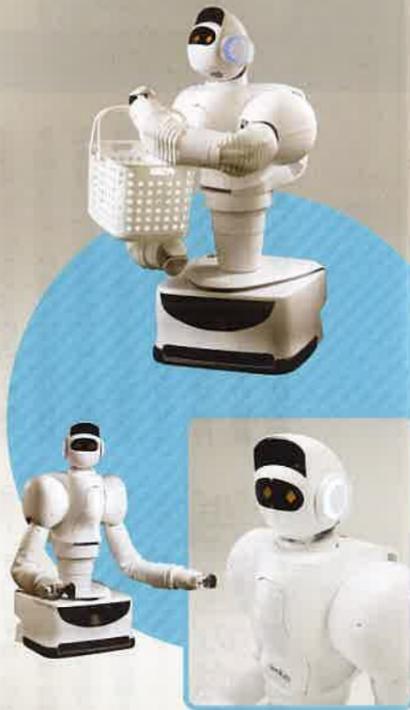
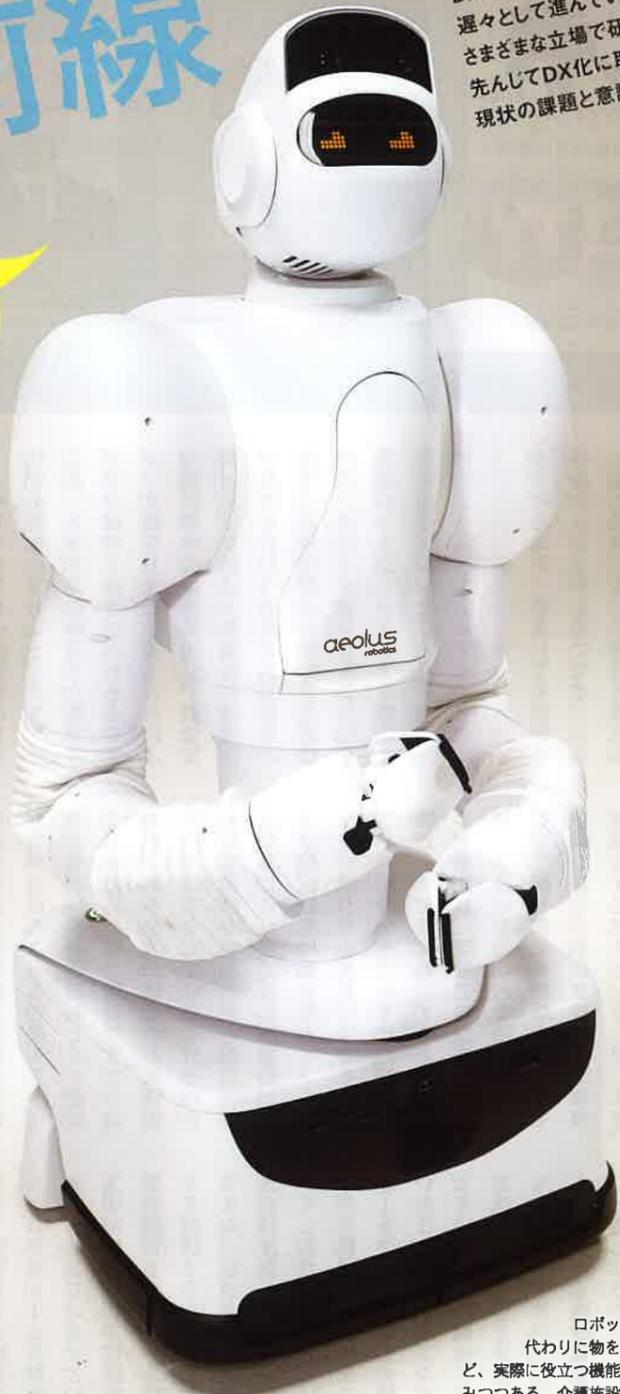
そのだ議員へのご意見・問い合わせはこちらまで



介護イノベーション 最前線

要介護者の急増、人材の不足と待遇改善など、多くの課題を抱えるこれからの介護現場。AI、ICTを中心としたイノベーションの活用によるDX化の推進が叫ばれて久しいが、遅々として進んでいない。そこで今回は、さまざまな立場で研究、普及に携わる有識者、先んじてDX化に取り組んでいる介護施設から、現状の課題と意識改革の重要性など最新の動向をひもとく。

いったい
どうなる!?



警察庁に新設の「科学犯罪対策室」を舞台に小比類巻(ティーン・フジオカ)と天才科学者・最上(岸井ゆきの)が、最先端科学にまつわる不可解な事件を捜査するドラマ「パンドラの果実〜科学犯罪捜査ファイル〜」。4月23日放送の第1話にアイオロス・ロボットが“出演”。最先端のAIを搭載した介護用ロボット・LEOとして登場し、事件解決のカギを握る重要な役どころを演じた。車いすを押して自走したり、チェスをしたりと話題となった。ドラマは毎週土曜夜10:00~10:54、日本テレビ系にて放送中、HuluオリジナルのSeas on2が6月25日(日)より独占配信開始。

米国・サンフランシスコに拠点を置く「Aeolus Robotics(アイオロス・ロボティクス)」社が開発したヒューマノイドAIロボット「アイオロス・ロボット」。AIにより、人の代わりに物を運搬する機能や、姿勢を識別した監視機能など、実際に役立つ機能を多数搭載し、日本の介護現場でも導入が進みつつある。介護施設の居室などの監視、エレベーターパネルや手すりなどの除菌作業など、人間でなくてもよい単純な作業を任せることで、人材を本質的な仕事に充てることできる。人の価値を高めるパートナーとして施設を行き交い活躍する、介護現場の未来が期待される。©丸文株式会社 URL:https://www.marubun.co.jp/

働きやすい未来に向けて! 「全国老協版介護ICT実証モデル」を展開中

全国老協は令和3年度から4年度にかけて「全国老協版介護ICT実証モデル」事業を実施中だ。介護サービスの質の向上・効率化を進めていく上で必須となる介護現場でのICT・テクノロジーの活用を、各ブロック8施設(⇒P11)の特別養護老人ホームに導入。導入前後の介護業務のタイムスタディーを通じた効果測定により、現場への効果的な導入方法を明らかにするのが狙いだ。

①実証事業で目指していること (介護提供者・運営者の観点)

「全国老協版介護ICT実証モデル」は最終的に全国へ普及し、生産性の向上の取り組みを広げていくことを目指す。生産性の向上とは、主に下記のような3つの事例をテーマとしている。

直接介護の時間の増加・平準化

- 対利用者サービスの時間増加

記録時間の減少、見回りの効率化

- 各業務負担に関する主観的評価(夜勤負担)
- 転倒・転落事故に対する不安

間接介護の時間の減少・平準化

- 申し送りの効率化によるスタッフ連携の質的向上
- 記録作成の効率化による業務軽減

次世代のための魅力ある職種へ

- 最先端技術の導入で、介護の仕事の楽しさ、面白さを伝える
- 次の世代に残す仕事を楽なものにする

②実証施設に新規導入、入れ替え、追加された介護ICT機器

見守り・コミュニケーション、介護業務支援の2分野に注力されている

見守りセンサー

心拍・呼吸等の生体モニタリング機能や離床感知の機能を持つ。

介護記録ソフト

「LIFE」(科学的介護情報システム)への入力に対応したCSVデータの出力機能を持ち、操作端末(スマホ、タブレット)によるデータ閲覧・入力の機能を持つ。

実証施設へのサポート

コンサルティング会社によるアドバイス、補助金、通信環境整備など

③実証モデルのスケジュール

~2022年12月

- ▶現場の実態調査+成功・失敗例の収集
- ▶効果検証および課題の深掘り

2023年1月~

- ▶大会・研究会議・セミナー等での成果発表
- ▶実証で得られたノウハウを蓄積した専用サイトを開設し、機器の比較、ICT活用サービス事例の紹介などを行う
- ▶ICTになかなか踏み込めない施設向けのアシスト事業の検討(財源は「地域医療介護総合確保基金」などを想定、スキームは厚労省の「介護ロボットの開発・実証・普及のプラットフォーム」構築事業などとの連携を想定)

実証モデルを確立することにより、生産性の向上だけでなく、職員の働きがいを引き出し、魅力ある職場づくりをして、人材確保にもつなげる!

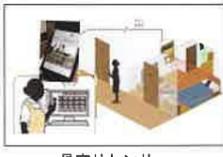
<p>移乗支援</p> <p>装着</p> <p>ロボット技術を用いて介助者のパワーアシストを行う装着型の機器</p> <p>非装着</p> <p>ロボット技術を用いて介助者による抱え上げ動作のパワーアシストを行う非装着型の機器</p> <p>厚労省・経産省によるロボット技術の介護利用開発重点分野の策定</p> <p>H24.11月 重点分野公表</p> <p>H26.2月 追加改定(黄枠)</p> <p>H29.10月 追加改定(ピンク枠)</p>	<p>移動支援</p> <p>屋外</p> <p>高齢者等の外出をサポートし、荷物等を安全に運搬できるロボット技術を用いた歩行支援機器</p> <p>屋内</p> <p>高齢者等の屋内移動や立ち座りをサポートし、特にトイレへの往復やトイレ内での姿勢保持を支援するロボット技術を用いた歩行支援機器</p> <p>装着</p> <p>高齢者等の外出をサポートし、転倒予防や歩行等を補助するロボット技術を用いた装着型の移動支援機器</p>	<p>排泄支援</p> <p>排泄物処理</p> <p>排泄物の処理にロボット技術を用いた設置位置調節可能なトイレ</p> <p>トイレ誘導</p> <p>ロボット技術を用いて排泄を予測し、的確なタイミングでトイレへ誘導する機器</p> <p>動作支援</p> <p>ロボット技術を用いてトイレ内での下衣の着脱等の排泄の一連の動作を支援する機器</p>	<p>見守り・コミュニケーション</p> <p>施設</p> <p>介護施設において使用する、センサーや外部通信機能を備えたロボット技術を用いた機器のプラットフォーム</p> <p>在宅</p> <p>在宅介護において使用する、転倒検知センサーや外部通信機能を備えたロボット技術を用いた機器のプラットフォーム</p> <p>生活支援</p> <p>高齢者等とのコミュニケーションにロボット技術を用いた生活支援機器</p>	<p>入浴支援</p> <p>ロボット技術を用いて浴槽に入浴する際の一連の動作を支援する機器</p> <p>介護業務支援</p> <p>ロボット技術を用いて、見守り、移動支援、排泄支援をはじめとする介護業務に伴う情報を収集・蓄積し、それを基に、高齢者等の必要な支援に活用することを可能とする機器</p>
--	--	--	--	---

老施協実証実験中!

老施協実証実験中!

1. ロボットの定義とは、
 - 情報を感知(センサー系)
 - 判断し(知能・制御系)
 - 動作する(駆動系)
 この3つの要素技術を有する、知能化した機械システム。
2. ロボット技術が応用され利用者の自立支援や介護者の負担の軽減に役立つ介護機器を介護ロボットと呼んでいる。

介護ロボットの例

<p>移乗支援</p>  <p>装着型パワーアシスト</p>	<p>移動支援</p>  <p>歩行アシストカート</p>
<p>排泄支援</p>  <p>自動排泄処理装置</p>	<p>認知症の方の見守り</p>  <p>見守りセンサー</p>

有識者が解説する

介護DX、ICT化の「現状と課題」

コロナ禍をきっかけにDX化に取り組む施設が増えたが、まだ進んでいるとは言えない。この現状を打破するにはどうすべきか、DX、ICT化の推進のためシステム開発や調査研究に力を注ぐ3人に聞いた。

 <p>一般社団法人 日本ケアテック協会 専務理事 事務局長 竹下康平氏</p>	 <p>公益財団法人 テクノエイド協会 企画部長 五島清国氏</p>	 <p>株式会社NTTデータ 経営研究所 アソシエイトパートナー 米澤麻子氏</p>
---	---	---

導入前に現状の課題分析と業務フローの設計が必須(米澤)

介護のDX化の成功にはチームリーダーが必要

——そもそもなぜ介護現場のDX化が必要なのでしょう。

五島 人手不足の解消や介護サビスの維持・向上はもちろんですが、介護を見える化することによって科学的介護を実現し、自立支援と重度化防止・安全性の確保につながるという側面もあります。

竹下 近年は厚生労働省も生産性向上のガイドラインを作成したり、現場のファシリテーターを養成する手引きを作ったりとテラシーの向上を図っていますね。

——そんな中、導入しても活用できないという声も多いです。

米澤 業務に合った機器の導入ができていないことが要因ですね。テクノロジの導入は①現状分析②目標の決定③業務フローの設計④機器の導入⑤運用状況の確認と展開、というのが通常のプロセス。各プロセスを検証しなければいけません。導入失敗には現場の課題の分析をしない、または業務フローの設計なしでシステムを導入する2つのパターンがあります。

竹下 さまざまな製品が出て選べるようになった反面、現場に知識がなければベストな製品をチョイスするのは現実的に難しく、使いこなすのはかなり難題ですからね。それはわれわれの協会の設立理由の一つにもなっています。そのためにも事業所が製品を選ぶ際の指標となる「ケアテック認証制度」、および認証制度に関わるガイドラインを作成しているところです。

五島 施設の中でDX化の旗振り役が必要ですね。チームリーダーを養成し、現場で課題を共有し、何から進めるかなどを話し合う。そして導入後にも課題や得られる情報をリーダーに集約し、改善策を模索する努力が必要だと思います。

竹下 そうですね、元々業務改善委員会等の会議体がある施設は現場が主体性を持って考える土壌があるので導入の成功率が高いです。

生産性の向上は労働力削減ではなく介護の質を上げるためのもの(竹下)

——しかし導入以前に予算の問題で二の足を踏んでしまうというのも実情だと思いますが。

米澤 確かに資本力によってDX格差が大きくなってきているなど感じます。厚労省や自治体では助成金やICTアドバイザーの派遣を行っていますので、それらを活用していただきたい。

五島 必要な機器を必要ときに必要なだけ使えるサブスクリプションのような新しいサービスにも可能性を見たいですね。予算の根本的な解決にはならないかもしれませんが、今後、最新機種が出てきたときにどうするかという問題もありますから。

竹下 いろいろな面で補助金が使えないようになったのはいいことですが、テクノロジを導入したからといって資金がたまっていく仕組みにはなっていないですからね。介護の生産性向上というのは労働力を削るためではなく、介護の質を上げるためのものです。生まれた時間は、利用者のQOL向上のためのサービスとして返していきたいというのが現場の思い。

補助金はスタートアップのみ継続できるシステムが必要に

テクノロジに対してパラダイムシフトが必要です(五島)

よね。また法人の自力での遂行が難しい場合は専門的なコンサルタントを入れるなど伴走者が必要。個人的な意見としては、社内をシステム化する上では介護業務を熟知した業務SE(システムエンジニア)的な人材が重要と考えます。

米澤 使いやすい機器であるか、セキュリティに信頼性のあるものが作られているかということも大切です。そして信頼性の高い機器を開発するには、施設側もデータを提供するための協力が必要ですね。現場と開発側が相互に機器の精度を上げる取り組みをしていくことが重要だと思います。

五島 現場ではこれまでテクノロジを使わなくても介護ができていたことで、テクノロジを使うという意識の醸成・教育が十分ではないと感じます。

——現場の意識改革が必要ということでしょうか。

五島 パラダイムシフトですね。技術はどんどん進化していきますから。若い世代の従事者が楽しく、やりがいを持って介護をしようとはしていないかと考えています。

使い続けるためのコストを、例えば「ICT活用推進体制加算」などを作って介護保険適用にできればいいなど、生産性が向上し介護の質が上がれば、ADLの維持、重度化防止、QOLの向上につながる、最終的に社会保険費が下がるのではないかと考えています。

——介護業界のDX化に今後どのようなことを期待されますか。

五島 タブレットも携帯も、下げて介護はできないですから、1つのデバイスでデータを共有できるような機器開発が進んでいくことに期待したいです。

竹下 協会にはそういったニーズを拾い上げて環境づくりを行うことが求められていると感じています。個人としては、ITの力で事務業務の省力化をし、介護従事者が本来の専門職に専念できるのがあるべき姿だと思っています。

米澤 今後はICTが当たり前前の世代が利用者になり、高齢者像もどんどん変わっていきますしね。高齢者の方が幸せに暮らすためのツールとしてICTやロボットがある。介護において、日本は海外に比べ制度もICTも先進しています。日本からいろいろな発信ができると思います。

よね。また法人の自力での遂行が難しい場合は専門的なコンサルタントを入れるなど伴走者が必要。個人的な意見としては、社内をシステム化する上では介護業務を熟知した業務SE(システムエンジニア)的な人材が重要と考えます。

米澤 使いやすい機器であるか、セキュリティに信頼性のあるものが作られているかということも大切です。そして信頼性の高い機器を開発するには、施設側もデータを提供するための協力が必要ですね。現場と開発側が相互に機器の精度を上げる取り組みをしていくことが重要だと思います。

五島 現場ではこれまでテクノロジを使わなくても介護ができていたことで、テクノロジを使うという意識の醸成・教育が十分ではないと感じます。

——現場の意識改革が必要ということでしょうか。

五島 パラダイムシフトですね。技術はどんどん進化していきますから。若い世代の従事者が楽しく、やりがいを持って介護をしようとはしていないかと考えています。

ブロック	都道府県	市区町村	施設名
北海道ブロック	北海道	南幌町	社会福祉法人南幌福祉会 特別養護老人ホーム南幌みどり苑
東北ブロック	宮城県	気仙沼市	社会福祉法人春園会 特別養護老人ホーム春園苑
関東ブロック	東京都	世田谷区	社会福祉法人友愛十字会 砧ホーム
東海北陸ブロック	富山県	富山市	社会福祉法人宣長康久会 地域密着型特別養護老人ホームささづ苑かすが
近畿ブロック	兵庫県	神戸市	社会福祉法人弘陵福祉会 特別養護老人ホーム六甲の館
中国ブロック	岡山県	津山市	社会福祉法人津山福祉会 特別養護老人ホーム高寿園
四国ブロック	香川県	高松市	社会福祉法人光寿会 特別養護老人ホームあかね
九州ブロック	宮崎県	都城市	社会福祉法人スマイリング・パーク 特別養護老人ホームほほえみの園

ノーリフトケアの実現に必要なテクノロジーをベースに活用

利用者者を第一に考えるため
まずはDXで介護士を幸せに

設立36年目の社会福祉法人弘陵福祉会は、兵庫県神戸市で定員70名、多床室の特別養護老人ホーム六甲の館を運営。12年の大規模改修の際に利用者の不安を軽減するためセラピーロボット・パロ（↓P12）と、施設長自らPC教室を開催して導入した介護記録システムを皮切りに、対話支援システム、見守りセンサーなどを導入してきた。施設長の溝田弘美さんは「介護士がハッピーでないと良いサービスを提供できない」という信念

兵庫県神戸市
社会福祉法人弘陵福祉会
特別養護老人ホーム
六甲の館

〒651-1101 兵庫県神戸市
北区山田町小部字妙賢山13番地17
TEL:078-594-2451
FAX:078-594-2453
https://rokko-yakata.jp/



の下、「テクノロジーの導入は職員の負担軽減のため」と語る。19年にオーストラリア発祥の持ち上げない・抱え上げない介護「ノーリフトケア」に出合ってから居室や浴室に天井走行式リフト（↓P13）を配置。「ノーリフトケア実現に必要なテクノロジー」を基準に導入を進めている。

当初は職員に不安があったが、「業務に追われ、こんなに効率的に仕事ができるんだというイメージを持つ機会がありません。反対派には真摯に説明を繰り返しました」と、職員と向き合ってきた。

現在は、共通の知識を得るため全職員が日本ノーリフト協会の研修を受講済み。施設長、看護師、介護士、介護支援専門員から成る「ノーリフトケア委員会」を月1回開き、機器導入や事例の検討を行うことでトップダウンを避け現場のモチベーション維持を図っている。

そして入浴介助装置ビューアット（↓P13）を導入したのは、「入浴介助に人員が取られ過ぎてフロアで手厚い介護ができない」という職員の声から。5分間の入浴だけで体が洗浄できるため、職員の負担や入浴時間が軽減。天井走行リフトとの相乗効果で、8人が必要だった入浴が4人で済むようになった。

最初に導入したのが転倒予防のベッド内蔵型センサーの見守りケアシステム（↓P12）。実際に事故が減った成功体験の下、翌年にマットレススーツ（↓P12）とシルエット見守りセンサー（↓P12）のほか、19年にインカムや介護記録システムなど徐々に環境を整備。あらかじめデモ機などで必要な機器を見極めて準備し、補助金を活用して計画的に推進された。

老施設の介護ICT実証モデル事業では、「権利擁護の観点から、利用者の眠りを守りたい」と眠りSCAN（↓P12）を全床に導入。朝6時前から部屋の並び順に行っていた起床介助が、「原則7時までは眠りを邪魔せず、覚醒した人から順に介助に入れるようになりました。利用者の体を回復する時間を守りつつ、業務も効率的になりました」と鈴木さん。サービスの質は職員の質にイコールする。介護ロボットは介護職の専門性を高めていく取り組みの一つです。

これまでの経験を踏まえ、「テクノロジーは導入より活用が難しい」と言い、砧ホームでは活用において2つのことを重視している。一つは職員への内発的動機付け。「人間の営み同様、介護という営みも道具によって進化する」福祉

「これにより入浴時間帯もフロアでの手厚い介護が実現した。こうした取り組みで「職員は腰痛ゼロ。別の施設で腰痛を発症した転職希望者も複数います」と、人員が集まる効果も出ている。

老施設の介護ICT実証モデル事業では4月、マット型の見守り介護ロボットams（↓P13）を全床に導入。「利用者の急変に対する介護士の不安軽減、看取り時期の想定などのため、特に心拍のデータやアラートの感度がいいものを選びました。夜間巡視のフロア



溝田弘美
Profile ●みぞた・ひろみ
社会福祉法人弘陵福祉会理事、特別養護老人ホーム六甲の館施設長、社会福祉士、兵庫県社会福祉士会理事

を見直し、福祉用具のチェックや利用者の衣類整理、職員の休憩に時間を充てて効果を実証中です」と溝田さん。さらに、ams、ネオスケア（↓P13）をiPhoneで管理し、アラートが介護記録に自動反映される仕組みの開発をメーカーと共に進めている。



A 六甲山の中腹、神戸で最も天空に近い標高415m。現在は居室15部屋に18台の天井走行式リフトを設置



B パロは入居者の人気者

老協協実証モデル施設が推進する

介護DX、ICT化の「意識改革」

介護をする上で生じる、さまざまな課題を解決するために導入が必要なテクノロジー。実際の現場ではどのように推進・運用されているのだろうか。老協協で本年度に行っている、介護ICT実証モデル事業に参加している8つの施設から、東西各1施設の事例を紹介する。

活用理念による内発的動機付けと柔軟なルール変更を重視

最先端テクノロジーは
導入よりも活用がカギ

社会福祉法人友愛十字会が運営する特別養護老人ホーム 砧ホームは開設から30年、従来型多床室で約60人が暮らす。人口が東京23区中最多の世田谷区にあり、区内に老人ホームが増加するのに対し、例し職員が減少。そこに危機感を覚え、「少人数でも介護できる体制を整えつつ、人が集まる魅力的な職場づくりをするサポートとして、テクノロジーの活用を始めました」と施設長の鈴木健太さんは語る。職員で課題を話し合い、16年に

東京都世田谷区
社会福祉法人友愛十字会
砧ホーム

〒157-0073 東京都世田谷区
砧3丁目9番11号
TEL:03-3416-3164
FAX:03-3416-3494
https://www.yuai.or.jp/facility/kinuta-home/



から順に介助に入れるようになりました。利用者の体を回復する時間を守りつつ、業務も効率的になりました」と鈴木さん。サービスの質は職員の質にイコールする。介護ロボットは介護職の専門性を高めていく取り組みの一つです。

これまでの経験を踏まえ、「テクノロジーは導入より活用が難しい」と言い、砧ホームでは活用において2つのことを重視している。一つは職員への内発的動機付け。「人間の営み同様、介護という営みも道具によって進化する」福祉

には福祉用具があり、それらを使いこなすのも介護職の専門性である」という活用理念を職員で共有し、現場発信でDXを推進している。もう一つは、使い勝手や効果を現場がリーダー層へ報告し、活用ルールを適時更新すること。活用ルールは「シルエット見守りセンサーは、プライバシー保護のためアラートが鳴るまで見えない」というような運用上のルール、「共用のマットレススーツは使用後に消毒する」といった共用上のルールの2つを設けている。

こうしてテクノロジーのサポートにより働きやすい環境づくりを進めて6年。平均年齢40代前半の職員が生き生きと働き、専門性を発揮している。以前は25人で回っていたローテーションが19人で可能になり、かつ有給消化率が高く離職者ゼロという成果も出ている。



鈴木健太
Profile ●すぎき・けんた
社会福祉法人友愛十字会法人本部事務局総務部、砧ホーム施設長、看護師、福祉用具専門相談員

こうしてテクノロジーのサポートにより働きやすい環境づくりを進めて6年。平均年齢40代前半の職員が生き生きと働き、専門性を発揮している。以前は25人で回っていたローテーションが19人で可能になり、かつ有給消化率が高く離職者ゼロという成果も出ている。



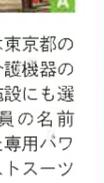
A 施設は東京都の次世代介護機器のモデル施設にも選定



B 職員の名前が入った専用パワーアシストスーツも



C なでるとかわいく鳴く癒やしのネコちゃん



D 居室は間仕切りとカーテンでプライベート空間を確保



14

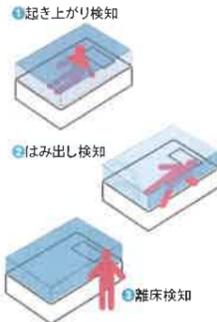


15

11



検知の種類



12



17



19



18



16



13



7



9



8



10



1



3



2



21

20

老施協実証
モデル施設が
活用する

介護DX、 「最新」

前頁の介護ICT実証モデル事業に参加している2つの施設「絆ホーム」と
長のために、どんな介護機器を導入しているのだろうか。ここでは、それ

18 介護入浴装置
ナノミストバス **六**
ミストで体の汚れを落とす。移動可能なベッド型のため軽労働で入浴でき、家庭用電源とコップ1杯の水があれば、どこでも利用が可能

19 小型
ICタイムレコーダー **六**
複雑なシフトや休暇の管理にも対応。サイズも重量もコンパクトで場所を問わず設置できる。ICカードを本体にスキャンさせるだけで打刻に対応

20 天井走行式リフト
ライズアトラス **六**
最大吊下重量205kg。電動/手動による緊急下降・停止機能、過負荷保護機能、過速度保護機能、吊りベルト緩み防止機能を装備

15 見守り介護ロボット
aams **六**
心拍、呼吸、寝着床、睡眠の状態など、離れた場所から利用者の状態をリアルタイムでモニタリングできる。一人一人にアラート設定も可能

16 入浴介助装置
ビュアット **六**
極微細気泡が体を洗浄。バスタブに5分漬かるだけでこすり洗いとボディソープが不要。ポータブルタイプで設置工事もなく使用できる

17 予測型見守りシステム
ネオスケア **六**
カメラがさまざまな危険動作の予兆を検知し、高齢者の転倒事故予防と職員の負担を軽減してくれる。居室の状況はスマートフォンで確認

12 対話支援システム
コミュニケーション **六**
話し手の声や音を分解し、聞き取りやすいクリアな音へ変換。耳につけずに聞こえやすい音を届けることで、スムーズな会話をサポート

13 見守りシステム
アウルサイト **六**
赤外線センサーと人工知能がベッド全体を見守り、被介護者の危険な状態をスマートフォンに通知。非接触で、利用者のプライバシーも保護

14 車椅子自動洗浄機
リフレッシュライトII **六**
食べこぼし汚れや尿臭も、丸洗いできれいに洗浄できる。洗浄から乾燥までは50~70分程度、定期的な洗浄は感染対策にも効果的だ

ICT化の テクノロジー

「六甲の館」では、入所している利用者のために、そこで働く職
それぞれの施設で使用している機器の機能や使用状況を紹介する。



9 インカムシステム **結**
職員同士の連携やスタッフルームからの申し送りについての連絡など、朝の忙しい時間でも一堂に会さずおのおの場所で情報共有ができる

10 携帯電話・タブレット **結**
施設で働く各職員が持つ携帯電話からは、眠りSCANや各センサーの状況が、タブレットからは利用者の生活や今の状態が逐一確認できる

11 シルエット
見守りセンサー **結**
リアルタイムで利用者の状態が見守れる。シルエット画像により、プライバシーに配慮しながら、利用者の転倒やけがなどを未然に防ぐ

6 アザラン型セラピーロボット
ハロ **結 六**
約50単語を識別し、約20種の鳴き声で反応。まぶた、頭、前・後脚を動かす。アニマル・セラピーと同等の効果を得られると確認されている

7 見守りケアシステム
M1/M2 **結**
利用者の動き（動き出し・起き上がり・端座位・離床）を通知するロボット機能を持った見守りベッド。M2は大体の体重も測定できる

8 介護リフト
つるべBセット **結**
車椅子とベッドの移乗に使用できるベッド固定型リフト。職員と利用者がかみあって顔の見える移乗介助を行い、安心と安全を確保する

3 マッスルスーツ **結**
電気不使用の人工筋肉は、最大25.5kgfのアシスト力で腰への負担を軽減。着脱は10秒で、雨天時・水場でも利用可能。メンテナンスも不要

4 なでなでねこちゃんDX2 **結**
頭、頸、背中、尻尾の4カ所にセンサーを配置しており、なでると触るの違いを感知して鳴き声を変える。本物のネコの声を録音している

5 クッション型セラピーロボット
クーボ **六**
なでて尻尾の振り方が変わるクッション。ときどき気まぐれに動く尻尾が、利用者同士の会話となる行動を促す契機になっている

1 見守り支援システム
眠りSCAN **結**
ベッドに設置したセンサーにより、体動（呼吸、心拍など）を測定。パソコンやタブレットにリアルタイムの状態が映し出され、確認が容易に

2 マッスルスーツ
エブリイ **結**
空気圧を利用した人工筋肉で、使用する人の動きに合わせて調整が可能。何かと腰をかかめることが多い介護業務の腰痛予防に一役買っている